

平成26年度 防衛大学校入校式  
来賓代表祝辞

防衛大学校本科第62期生始め、理工学研究科及び総合安全保障研究科課程の学生諸君、また、遠く祖国を離れて今日という日を迎えられたカンボジア王国、インドネシア共和国、ラオス人民民主共和国、モンゴル国、フィリピン共和国、大韓民国、タイ王国、東ティモール民主共和国、及びベトナム社会主義共和国からの留学生諸君、入校まことにめでとうございます。

諸君が見事難関を突破し、晴れて入校の栄冠を勝ち取られたことに敬意を表しますとともに、この日を待ち望んでおられたご家族の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

本日は、陸海空自衛隊を代表しまして、諸君に一言申し上げたいと思います。

今から60年以上前、防衛大学校第一期生の入校式において、初代学校長榎智雄先生は、入校生に対し、二つのことを説いておられます。「第一に諸君の任務は偏することなき均衡のとれた人物を要求していること、第二に諸君の任務は民主制度に対する的確な理解を要求していること」という2点です。

第一点の「偏することなき均衡のとれた人物」とは、いかに学問に秀でていても、人としての品格や人を指揮する力量、それらを支える身体的能力に欠けるところが有ってはならない。本校に履修する目的を達成するためには、学問への精励、人格の陶冶、身体の鍛錬、全てに精進することが必要であるということを説いておられるのだと思います。

第二の「民主制度に対する的確な理解」とは、民主主義と服従の精神、あるいは自由と規律の関係について、理屈ではなく、その本質を理解するということでもあります。規律なくして真の自由はなく、遵法精神または正義に服従する意思なくして真の民主主義は成立しえないのであります。民主主義というある面では非常に脆弱な政治体制の下で、国民に対して責任を有する幹部自衛官を目指す諸君にとって、これは必要不可欠な要素であると思います。

この二点は、60年以上の時を経た今日においても、全く色あせることのない、防衛大学校の教育の根幹をなすものだと考えます。諸君は、この2点について、これからの四年間を通じて、常に真剣

に自問自答することになるであります。そして、そのことが将来、諸君の幹部自衛官としての人格の基礎を形作る資質となるものと確信しています。

さて、そのような資質を身につけた諸君が、将来活躍することになるであろう国際社会に目を転ずれば、我が国周辺の安全保障環境は、今までになく、複雑かつ厳しいものとなっております。正に、学生歌に歌われているように「風荒み、乱れ雲飛び、行く手に波逆巻く」と言っても過言ではないようなその現場において、本校の卒業生は、国内外を問わず、あらゆる場面で活躍しています。警戒監視活動や対領空侵犯措置は、24時間、365日、常続的に実施されています。東シナ海や南西諸島方面において、自衛隊は、海上保安庁や警察等他機関と協力しつつ、24時間態勢で厳格な警戒監視や対応にあたっています。たび重なる北朝鮮の弾道ミサイル発射に対しては、航空総隊司令官を指揮官とするBMD統合任務部隊が対応し、ソマリア沖・アデン湾においては、自衛艦隊司令官を指揮官とする派遣海賊対処部隊が、他国とも協力して、様々な任務を遂行しています。さらに、アフリカの南スーダンでは、中央即応集団隷下の部隊が国連平和維持活動に従事し国際社会の平和と安定に多大な貢献をしています。

自衛隊は、八年前に統合運用体制に移行し、このような厳しい安全保障環境の中での各種の任務を遂行してきました。統合運用体制というのは、統合幕僚長が自衛隊の運用に関し一元的に防衛大臣を補佐し、大臣の命令は統合幕僚長がこれを執行することにより、陸海空の三自衛隊が一元的、有機的にその実力を発揮するという体制です。

統合運用の重要性は古くから語られており、統合の大先輩である米軍は、一九八〇年代から本格的に統合運用に取り組んできました。しかし、彼らは「統合運用は非常にタフで難しい」ということを感じており、日本の自衛隊が統合運用体制に移行するにあたって、「最初の一〇年、二〇年はなかなかうまくはいかないだろう。」と思っていたようです。しかし、東日本大震災へ対処した統合任務部隊、JTF-東北、北朝鮮の弾道ミサイル発射事案に対応するJTF-BMD、伊豆大島災害派遣に対応した、JTF-樺、等に見られる自衛隊の統合運用は、まだまだ改善の余地があるとは言いながらも、全体としては非常に円滑に、整齐と任務を遂行することができまし

た。米軍等の外国軍も、日本の統合運用が予想以上にうまくいっていると感心しており、その手法に興味を持っているようです。

日本の統合運用がこのように順調に滑り出した要因の一つに、陸上、海上、航空要員を共に教育する防衛大学校の存在が有ることは明らかです。防衛大学校は、陸海空自衛隊別々の士官学校ではなく、統一された単一の士官学校であるという点で、世界でも数少ない幹部養成機関であります。

統合運用にとって大切なことは、陸海空それぞれの自衛隊がその特性を希薄にして相違を無くすことではなく、それぞれの特性と相違を相互に理解しようとする想いです。相互理解を可能とするために必要なのは、相手に対する信頼と共感ですが、同期と四年間同じ釜の飯を食べ、苦楽をともにし、切磋琢磨しあい、青春時代を過すこの小原台の共通の思い出が、それら共感、信頼を生み出すのです。勉学の間や学生舎、さらには校友会活動などを通じて、同期生としての友情・絆を大いに育んでもらいたいと思います。

留学生のみなさんにとっても、これは同じです。この小原台での共通の思い出が、ひいては日本と各国、あるいは各国間の相互理解に大きく貢献することになると思います。そのような意味で、諸君は祖国にとっての「宝」であり、日本にとっての「かけがえのない友人」であります。どうか、これからの四年間、日本の学生諸君とともに真の友情を築き、将来にわたり、祖国と日本との架け橋になられんことを期待しています。

次に、理工学及び総合安全保障研究科学生の諸君、今日の科学技術は、日々進化しており、また、グローバルな安全保障環境も大きく動いています。科学技術及び安全保障に関する専門的知識・技能は、一国の防衛を全うするために必要不可欠のものであり、自衛隊もまた、この変化に遅れをとることは許されません。諸君は、それぞれの専門分野において最先端の知識、動向を吸収し、自らが我が国の防衛に資する装備品や安全保障戦略を生み出すのだ、という気概をもって日々研鑽を積んでもらいたいと思います。

本日、ご臨席のご家族の皆様には、今日この日を迎えられ、ご子息・ご息女を本校に送り出すことに、幾ばくかの不安をお持ちの方もいらっしゃるものと拝察いたしますが、どうかご安心ください。ご

子息・ご息女が夏季休暇を利用して帰省した際には、必ずや、見違えるほど凛々しく成長した姿を目の当たりにされ、驚かれることでしょう。今まで彼らの先輩やご家族からも、そのような喜びの声を数多く頂いております。これも國分防衛大学校長以下、防衛大学校職員の熱意溢れる教育によるものと、その御努力に敬意を表するものであります。

最後に、ご来賓各位におかれましては、日頃から防衛省・自衛隊、就中、防衛大学校に対するご理解とご支援を賜りまして、衷心より御礼申し上げます。また今後とも引き続きご高配を賜りますようお願い申し上げます、私の祝辞とさせていただきます。

平成二十六年四月五日

統合幕僚副長 陸将 松村 五郎